

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05673・19K20875

研究課題名（和文）中国少数民族政策と歴史的制度論

研究課題名（英文）China's ethnic policy and historical institutionalism

研究代表者

熊倉 潤（Kumakura, Jun）

法政大学・法学部・准教授

研究者番号：60826105

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国共産党が少数民族エリートをどのように任用したかに焦点を当てています。中国の少数民族政策はこれまで政治的に論争的なテーマでしたが、政治学の観点からの研究は世界的にも希少です。本研究の中間成果の1つが、『国際政治』掲載の論文「中ソ対立下の中国少数民族幹部政策：新疆ウイグル自治区の事例から（一九六六-一九七六年）」です。最終成果は中公新書から2022年6月に出版予定の『新疆ウイグル自治区：中国共産党支配の70年』にまとめました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果は、これまで明確なイメージを持って語られてこなかった、中国の新疆統治の核心的な部分の一つである、少数民族エリートの任用の過程に迫るものです。少数民族が迫害された時期に一部の少数民族エリートが昇進したこと、時期を経るにつれて少数民族が実権を失ったことなどを、かなりの程度明らかにしました。その成果のエッセンスは、中公新書から2022年6月に出版予定の『新疆ウイグル自治区：中国共産党支配の70年』として、広く日本社会に還元します。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I focus specifically on how the Chinese Communist Party has appointed ethnic minority elites. China's ethnic minority policy has been a politically controversial subject, but little research has been done from the point of view of political science. One of the interim results of this research project is "China's Ethnic-Minority Cadres Policy during the Sino-Soviet Confrontation: The Case of the Xinjiang Uyghur Autonomous Region (1966-1976)" (International Relations, 2019). The final results are summarized in Xinjiang Uyghur Autonomous Region: 70 Years of Chinese Communist Party Rule scheduled to be published in June 2022 from Chuko Shinsho.

研究分野：政治学

キーワード：中国 少数民族 新疆 ウイグル エリート 自治 共産党

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年の中国政治研究には比較政治学の理論が導入されつつあるが(たとえば、参考文献(1))中国少数民族政策研究の分野と比較政治学との接続は、国内外含め、未開拓のフロンティアとして残されている。筆者の従来の研究により、中国文化大革命期の少数民族エリートの登用、昇進等の実態が明らかになったが、こうした中国政治研究の新たな知見は、中国政治に固有のものではなく、政治学の理論によって説明される、一種普遍性を有する政治現象ではないか、という学術的「問い」が生じた。

これまでの筆者の研究により、文革期中国の民族政策の全体像及び少数民族エリートの登用、昇進等の実態が明らかになるにつれ、こうした中国政治研究における新たな知見は、中国政治に固有のものではなく、政治学の理論によって説明される、一種普遍性を有する政治現象ではないかという疑問が浮上した。具体的には、文革のような巨大な政治変動を経ても政治エリート集団内部の民族構成が、マクロ的に見ればほとんど変化しなかったことを、筆者は既に指摘してきたが、このような中国少数民族エリートを巡る政治及び民族政策の帰結は、政治学の理論である歴史的制度論によって説明可能であり、また説明されるべき問題なのではないかという問題意識が強まった。

近年、比較政治学の理論研究者の間で、1980年代以降盛んに論じられてきた新制度論の知見と手法を、民主主義政治だけでなく、独裁政治にも適用し、その妥当性と有用性を検証してみようとする「制度の再発見」の動きが活発になっている。たとえば林載桓は、こうした比較政治学の潮流に基づき、文革期中国の軍の介入と撤退を比較政治における独裁政治及び政軍関係等の概念によって説明し、軍の政治介入及びその周縁の実像に迫り、中国政治研究に大きく貢献した(参考文献(1))。また加茂具樹、林載桓らは、科研費基盤研究(B)「中国一党支配体制の形成と変容：歴史的制度論からの考察」(2015-17年度)等において、中国政治研究への歴史的制度論の援用を試みている。こうして中国政治研究と比較政治学との複合的領域が誕生しつつあるが、中国の少数民族政策ないし少数民族地域の統治構造と歴史的制度論の接合の試みは、これまで行われてこなかった。中国少数民族政策の研究は、比較政治学の理論の導入から取り残されてきた感があり、換言すれば、中国少数民族政策と比較政治学の結節点は今のところ未開拓のフロンティアとして残されていた。

2. 研究の目的

本研究は、筆者がこれまで明らかにしてきた中国少数民族エリートの歴史的形成過程に関する研究成果を基に、国内外の研究者に先駆けて、中国少数民族政策研究に歴史的制度論及び新制度論の知見を導入し、理論の妥当性と有用性の検証を行い、中国政治研究にインプリケーションを与えることを目的とする。

中国少数民族政策の通史はこれまでも存在してきたが、中国少数民族政策と比較政治学の理論を結びつけた研究は、本研究において他にない。中国少数民族政策の従来の研究は、毛沢東時代に一部の少数民族自治区党委員会第一書記の地位に少数民族が就任していたにもかかわらず、なぜ文革後に漢族が同地位を独占するようになるのか、という問題に答えられていなかった。筆者は、歴史的制度論からの考察によって、この問題に対する一つの答えを提示し、中国政治研究に貢献する。

3. 研究の方法

本研究の方法は政治学と歴史学の接合である。中国少数民族政策の研究への比較政治理論の導入及び検証を主たる内容とする。その際、本研究の標題にあるように歴史的制度論の導入と検証を主な研究課題とするが、本研究と事実上密接な関係にある政軍関係、独裁政治、合理的選抜論、及び対外行動と国内政治の関係に関する理論的研究に関しても、本研究の議論の射程から排除しない。

4. 研究成果

以下の2段階にわたって研究を行った。

(1) 中国少数民族政策に関する資料収集

中国少数民族政策を巡る通説的な見解として、1960年代に中ソ対立が進行した結果、国境

に近い少数民族地域において、少数民族エリートが「肅清」され、漢族主導の体制が確立されたという説（たとえば参考文献(2)(3)）がある。この説の根拠は、中ソ対立が進行する中、内モンゴル自治区党委員会第一書記であったモンゴル族のウランフーが失脚し、文革期にモンゴル族の幹部及び民衆が迫害されたことにある。しかし、筆者の過去の研究が明らかにしてきたように、ソ連と国境を接する新疆ウイグル自治区では、多くの少数民族エリートが生き残り、また若い少数民族エリートが抜擢されていた。このことは、政治学における対外行動の国内政治に与える影響に関する議論とも関係しており、中ソ関係の悪化が内政に与えた影響が必ずしも少数民族の迫害に帰結するのではなく、一部の少数民族への優遇につながった面もあることを物語っている。最近の研究（参考文献(1)）を踏まえると、少数民族エリートと独裁者、軍の関係が重要な問題となるが、これはミクロな歴史研究を一層積み重ねなければ安易に結論を出せない問題である。そこでこの段階では特に、中華人民共和国建国（1949年）以来、中越戦争（1979年）に至る時期の少数民族エリートと独裁者、そして軍の三角関係を明らかにした。この過程で、香港中文大学、台湾中央研究院、政治大学、ドイツのケルン大学等において資料収集を行った。

（2）中国少数民族政策の歴史的制度論からの考察

第1段階の歴史研究に基づき、歴史的制度論の中国少数民族政策研究への適用の議論を行う。中国の少数民族政策の特徴として、指導部への少数民族エリートの起用が限定的であること、特に1977年以降、少数民族自治区の最高指導者の地位を漢族がほぼ独占していることが注目されている。本研究は主に、1950年代に中国の民族区域自治制度が確立する過程で、少数民族自治区の政策執行者である自治区党委員会第一書記の地位に少数民族を就任させることが、制度に明示的に盛り込まれなかった点に着目する。この制度は同地位に漢族が就任する可能性を担保するものであったが、そうした制度の存在にもかかわらず、1977年まで一部の少数民族自治区党委員会第一書記に現地出身の少数民族が就任していたことも重要である（下記の表参照）。その背景には、1976年に死去した毛沢東の選好が関係していたと考えられる。毛沢東の発言等から言えることとして、毛沢東は少数民族幹部の起用、特に自身の権威を示す大胆な抜擢に積極的であった。それに対し、後年の最高指導者である鄧小平が少数民族の起用に積極的であったことを示す証拠はなく、彼の発言等からはむしろ消極的な姿勢が窺われる。したがって、中国の民族区域自治制度において少数民族自治区党委員会第一書記の帰属民族を定めていなかったことは、帰属民族に関わらず、独裁者の選好に合致する政治エリートの同第一書記への就任を可能ならしめていたのであり、少数民族の起用に比較的積極的であった毛沢東の死去後、少数民族の起用を格別に志向する独裁者が現れなかったことから、漢族が圧倒的多数を占める党内情勢と制度の特徴を反映して、同地位に漢族が就任する傾向が強まったと考えられる。このように歴史的制度論の観点から制度と独裁者の選好を踏まえて説明することで、なぜ毛沢東時代に少数民族自治区党委員会第一書記の地位に少数民族が就任していたにもかかわらず、文革後に漢族が同地位を独占するようになるのか、という中国少数民族研究の長年の課題に一つの答えを提示できよう。

この研究成果は直接的には『国際政治』掲載の論文「中ソ対立下の中国少数民族幹部政策：新疆ウイグル自治区の事例から（一九六六-一九七六年）」として発表された。またその後の分析は、中公新書から2022年6月に出版予定の『新疆ウイグル自治区：中国共産党支配の70年』に反映されることになる。

表 少数民族自治区党委員会第一書記に就任した現地出身の少数民族

	50年代	60年代	70年代
内蒙古	ウランフー（蒙古族 40年代-66年）		-
寧夏	-	楊静仁（回族 61-66年）	-
広西	-	韋国清（チワン族 61-66年）	韋国清（チワン族 71-75年）
新疆	-	-	賽福鼎（ウイグル族 72-77年）
チベット	-	-	-

本研究の研究成果は、これまで明確なイメージを持って語られてこなかった、中国の少数民族統治の核心的な部分の一つである、少数民族エリートの任用の過程に迫るものである。少数民族が迫害された時期に一部の少数民族エリートが昇進したこと、時期を経るにつれて少数民族が実権を失ったことなどを、かなりの程度明らかにした。中国の少数民族政策はこれまで政治的に論争的なテーマであるが、政治学の観点からの研究は世界的にも希少であった。本研究の成果のエッセンスは、中公新書から2022年6月に出版予定の『新疆ウイグル自治区：中国共産党支配の70年』として、広く日本社会に還元されるであろう。

参考文献

- (1)林載桓『人民解放軍と中国政治 文化大革命から鄧小平へ』名古屋大学出版会, 2014.
- (2)楊海英『墓標なき草原 内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』岩波書店, 2009-2011.
- (3)星野昌裕「内モンゴルの文化大革命とその現代的意味」国分良成編『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会, 2003.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 熊倉潤	4. 巻 197
2. 論文標題 中ソ対立下の中国少数民族幹部政策 新疆ウイグル自治区の事例から（一九六六 - 一九七六年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 58-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊倉潤	4. 巻 48
2. 論文標題 中国共産党の新疆統治の始まりと少数民族エリート（1949-52年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 問題と研究	6. 最初と最後の頁 99-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 熊倉潤
2. 発表標題 新疆ウイグル自治区における反右派闘争：少数民族エリートの役割に注目して
3. 学会等名 アジア政経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊倉潤
2. 発表標題 東突厥斯坦共和國部分領導者於中共建政之後的「中國化」過程
3. 学会等名 台湾国立政治大学民族学研究所国際ワークショップ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊倉潤
2. 発表標題 文革時期新疆以及其他中國少數民族地區的幹部結構之比較 (1966 - 1976)
3. 学会等名 International Workshop “Chinese History after 1949” (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 熊倉潤	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 民族自決と民族団結	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------